研究プロジェクト・論文

21歳の迷路

――*A Summer Bird-Cage* に見るジェンダーと姉妹の確執――

風　間　末起子
現代社会学部・社会システム学科

1．心の傷を癒すために

ドラブル（Margaret Drabble, 1939－）は大学卒業後、24歳の若さで初めて小説を出版した。それが *A Summer Bird-Cage*（1963）である。最初の作品で作家は何を表現しようとしたのか、それは読者として興味誘われる部分だ。

作品では、ドラブル自身と重なるように、卒業直後の21歳の女性が直面していく人生の選択とその戸惑いが描かれている。彼女の迷いの基底部には姉との確執が澱（オリ）のように沈殿している。この沈殿物を取り除くことが、彼女の卒業後の自己形成の上で重要事項になっている。その意味で小説の主要テーマは姉妹の確執とその回復と言える。

しかもこのテーマはその後のドラブル作品で何度も繰り返し描かれることになる。作家の初期作品には、のちの作品で頻繁に扱われる主題が予表されるものだが、ドラブルの場合も姉妹の確執は一種の強迫観念とも言える執拗さで描き続けられている。その執着の理由の一つは、ドラブル自身の家族関係に起因するが、これについてはあとで述べることにする。もう一つの理由として、文学の伝統的枠組みへのドラブルの関心、という理由が推察できる。

次の引用は *A Summer Bird-Cage* の最終章（11章）からの一節である。一人称の語り手の主人公 Sarah Bennett が夕食後の静かなひとときを姉 Louise と共に過ごす場面である。Sarah は、シナトラのレコードを聴きながらくつろぐ自分たちの姿を、「仲良くのんびりと夕べを過ごす姉妹－昔の小説の中に登場するお決まりだが魅力的なパターン」と表現している。

> I was struck as we [Sarah & Louise] sat there by the charming convention of the scene — sisteres idling away an odd evening in happy companionship. It was like something out *Middlemarch* or even Jane Austen.
>
> (Chap. 11, p. 171)[1]

ドラブルの場合、過去の文学作品の 're-vision'（読み直し）というテーマは、第五作目の小説 *The Waterfall*（1969）において追求されているが、[2] *A Summer Bird-Cage* でも過去の作品、具体的には Jane Austen の *Pride and Prejudice*（1813）と George Eliot の *Middlemarch*（1871－2）の両作品から姉妹関係というモチーフを借用している。[3] このモチーフへのドラブルの強い関心は、Myer とのインタビューで "I thought all novels were about sisters"[4] と述べていることでも明らかだ。

確かに過去の文学作品において、姉妹の絆や確執のテーマは、新約聖書の「ルカによる福音

Symbiosis and Conflict in the Bond between Sisters: A Study of *A Summer Bird-Cage* by Margaret Drabble

書」10章に登場する姉妹 Martha と Mary、ギリシャ悲劇の Antigone と Ismene、Electra と Chrysothemis の姉妹関係に始まって、のちの数多くの文学作品の中で繰り返し使用されている。[5] ドラブルの小説においても、主題もしくは脇筋として姉妹関係を用いる作品を数えたら枚挙にいとまがない。[6]

ドラブルが姉妹関係のテーマを絶えず追求したのは過去の文学作品の中にその原型を見つけ出し、読み直しの材料として過去を掘り起こしたわけだが、彼女がこのテーマを選択したもう一つ別の理由がある。彼女自身の家族関係、とりわけ姉妹関係の中に、その理由を探ることができる。ドラブルの小説では不仲の母娘関係や姉妹・兄妹関係が主要なテーマとして繰り返し描かれるが、そうした家族関係はドラブル自身の生い立ちを反映している。ドラブルの実姉で同様に作家であるバイアット（A. S. Byatt, 1936－）との関係については、ドラブル自身がインタビューの中で、子供時代の姉への偶像視と姉からの無視、その時味わった孤独、姉への競争心と脅え、さらには作家になってからの二人の緊張関係などについて明らかにしている。またドラブルは、子供時代を共有する姉妹が作家となった場合、互いの小説の材料を知らずに使ってしまうような侵犯的行為を危ぐすると述べている。[7] バイアットも、芸術は記憶の変形したものであり、極めて個人的なものだから、他の作家と同じ記憶を共有することは創作の際に自分独自の空間を作り出すのを難しくさせると言っている。[8] こうした二人の関係から推測して、多くの批評家は、ドラブルの *A Summer Bird-Cage* の中にこの二人の作家の緊張関係の投影を探り、同じように姉妹の確執を描いたバイアットの小説 *The Game*（1967）を妹ドラブルへの姉バイアットの返答だと解釈する。[9]

ドラブルは、子供時代の家族関係や生まれ育った土地が人々に決定的な影響を与えるという考えをインタビューの中で述べている。[10] その思いを小説の中でも登場人物たちに語らせている。例えば第四作目の小説 *Jerusalem the Golden*（1967）の Clara は偏狭で独善的な母親との関係を断ち切りたいと望んでいるが、一方で親子関係は切断できるようなものではなく絆は死ぬまで続くと言って、親子関係の根深さへの不安を吐露している。[11] *A Summer Bird-Cage* においても、Sarah は姉 Louise の新婚旅行先での様子を友人から知らされる時、表面上は姉への無関心を装い姉との絆を断ち切ったふりをするが、却って血の絆の強さを意識させられる結果になる。Sarah も Clara も、ドラブル自身と同様に、“blood is thicker than water”（Chap. 11, p. 192）を強く意識している。

ドラブル自身の家族関係に戻ると、Bokat は、その著書の中で、ドラブルの母親が実際に鬱病であったこと、そのためにドラブルが母親から逃れる必要性があったこと、またその母親に代わる代理母を探す必要性があったことなど、こうした状況が小説中の人物に繰り返し投影されていると指摘する。Bokat は、作家は想像上の世界を作り出すことで子供時代の憧れを充足させ得るという Freud の考え方をドラブルに応用して、ドラブル自身の個人的な経歴と作品との心理的相関関係を探っている。この“repetition compulsion”（繰り返しの衝動）は、作家が自分の作品を手段にして試みる心理的浄化作用である。Bokat は、この心理作用を、ドラブルが母親との関係、姉との関係の浄化のために採用していると解釈する。つまり、母親が鬱病であったために、ドラブルは子供時代に充分なケアを情緒的に受けられなかった。その結果、彼女は姉との関係に執着するようになるが、この姉妹関係は母への怒りの代償行為であるから常に緊張感のあるものとなり、性格形成に強い影響を与えることになる。[12]

ドラブルが姉バイアットと共に体験した求愛と拒絶、競争心と分離欲求は解決されないまま、大人になっても継続しているために、二人の共生とライバル的絆はやがて作品の中でドラブルの強迫観念となり、このテーマを何度も繰り返

し追求していくことになる。“repetition compulsion”は、作家の不愉快なトラウマ的経験を克服するために、姉妹のテーマを繰り返すことで、徹底的に不愉快な体験を調査しようとする衝動である。これによって、作家は人物に最良の解決策を発見させようと試みる。[13] このように、時として作家は、子供時代に味わった心の傷を修復するために、繰り返しの心理的浄化作用として文学作品を創作していくと言える。

次章から最後の4章までは、*A Summer Bird-Cage* の姉妹関係に注目して、Sarah の過去への探索、姉からの分離と自己の確立過程、姉との関係性の修復までを詳細に眺めていきたい。

2．過去と子供時代

‘homecoming’という行動は、ドラブル小説ではヒロインたちの常套行為である。[14] 彼女たちはいずれも閉塞的な家族や故郷から逃げて、そこから分離した自己を作り上げようと努力するが、結局、自己規定や自己統合のために再び故郷や家族のもとに戻っていく。過去を調べることは自分がたどった自己形成の過程や動機を探り、‘identity’の再構築のための手段となる。ドラブル自身もインタビューの中で、人が生まれ育った場所は単なる場所というのではなく、そこに居たのが幼い頃だったからこそ重要である、つまり人格の形成を理解するには故郷に戻ることが鍵だと述べている。[15] 言い換えれば、人は過去から逃れられないということである。

A Summer Bird-Cage の Sarah も姉の結婚式に出席するために故郷に呼び戻されている。小説は Sarah の帰国と帰郷から始まる。大学生活も外国暮らしも一時的な逃避であり、単に現実認識を一時的に延期させる試みにすぎない。結局、故郷に帰ることで Sarah は切り離そうとした過去に戻って、それを徹底的に調べる作業に入っていくことになる。

故郷に戻った途端に、Sarah は子供時代からの積年の姉への恨みと嫉妬を再燃させる。すっきりした服装で駅に迎えに来た姉を見るにつけ、自分は「ほどけたお下げ髪で、ねじれたベルトと引きづるようなコートを着た小学生」(Chap. 1, p. 14) に舞い戻った気分になる。Sarah の劣等意識はおとぎ話の人物へと発展していく。“heiress”のように優雅に歩く姉に比べると、自分はシンデレラかシンデレラの醜い姉たちのようにみすぼらしく姉のあとを追従していく。(Chap. 1, p. 14) おとぎ話への言及は子供時代を連想させ、連鎖的に Sarah は姉にいじめられ無視された子供時代を次々に思い出す作業に入っていく。

子供時代や過去への調査を開始する象徴的な行為は、帰省した最初の夜に行われる。Sarah は自室の引き出しやタンスを探って忘れかけていた服や手紙を取り出してみる。[16] (Chap. 1, pp. 17－18) 隠された場所を探すという行為は心の奥底を探る行為の比喩であるが、Moran も、タンスや引き出しを調べる行為は心理的統合のための手段であり過去への探求の第一歩であると指摘する。[17]

引き出しを探る行為、過去を想起させる行為を Sarah は具体的なものにしていく。Sarah は姉 Louise との交流を通して、二人の心理に深く影響している子供時代に遡っていく。結婚式前日の真夜中に、Louise は白い寝間着姿で酔っぱらいながら檻の中の動物のように歩き回っている。頭にはカーラーを巻き付け、顔にはコールドクリームがテカテカと光り、口にはタバコをくわえている。この場の姉は人なつっこく、Sarah は姉が素の姿を無用心に見せているように思える。“approachable”、“communicative”、“her drunken accessibility” (Chap. 2, pp. 22－23) という表現で描写される姉の親しげな態度は極めて稀なものだったから、それに呼応するように Sarah も何かと姉の世話をしてやる。ところが翌朝には、前夜の姉の気さくな態度は消失し、いつものよそよそしさを漂わす。

Louise の急激な変化、求愛や親しさの直後に無関心や無視の態度を見せることについて、

Bokat は、親との接触やケアを充分に受けなかった子供がその代償として姉妹愛に集中し、姉妹は各々が自分の否定的な感情をぶつけるための対象として相手を使うことになる、と説明している。[18] 姉妹は自分の子供時代の怒りの代理的対象として互いを使うのである。Sarah 姉妹の両親のように、親が子供を置いたまま休暇を取りすぎたり、肉体的な接触を嫌悪したりして、子供から遠ざかっていた場合、姉妹は互いに求愛と拒絶を繰り返すことで、子供時代の怒りの代償行為としていく。

一つの例として Sarah は子供の頃、寄宿学校から帰省する姉を迎えに駅まで出向いた日のことを思い出す。この日の Louise は Sarah の存在を完全に無視する。この場で味わった遺棄されることへの脅えは、大人になった今も肉体的な接触に対して感じる不安感の中で再現されている。Sarah は姉のウェディング・ドレスのボタン掛けを手伝う時にその肉体的接近に嫌悪感を感じるし（Chap. 2, p. 27)、身近に姉がいると近親相姦的な不安定な気持に駆られる。[19]（Chap. 11, p. 207）これは、姉に愛想よくした途端に冷淡な態度で罰せられるという体験を通して、Sarah が肉体的接近に対して本能的に脅える不安定な心理状態に置かれているわけだが、逆に彼女自身が姉に同様の仕返しをする場合もある。Louise はドレスのボタン掛けを手伝ってもらいながら、「処女の花嫁」の話題から女同士の親密な会話に入ろうとするが、Sarah は素っ気なく反応して姉が見せた親しさに対して冷淡さで仕返しをする。(Chap. 2, pp. 27－28)

このように、姉との確執の根源は子供時代からの心理の層の中に確認できる。そして過去を探索するという作業は自己認識のための一つの起点となっている。Sarah はさらに次の段階へと進んでいく。彼女は女性にとっての結婚やキャリア、セクシュアリティへの考察を深めていく。

3．ロール・モデル探しと "to be myself" の模索

Sarah は自分独自の自我を確立させるためには、姉 Louise から分離しなければならないと考えている。それはちょうどドラブルの姉バイアットが "to be myself"[20] のために妹ドラブルの影響から自分を切り離したいと願ってきた姿に重なる。しかし、Sarah の場合、統合的な自我を確立するためには、姉を単に切り捨てるのではなく、むしろ自分自身と姉の相補性に気づき、姉をも取り込みながら新たな地点を切り開いていかなければならない。

姉妹の対立は単なる競争心に集約されるのではなく、分裂した自我の比喩であり、相補性の比喩と解釈できる。[21] 姉妹は自分がなりたい者であると同時になりたくない者でもある。姉妹が互いを妬んだり憐れんだりするのは、相手に自分の 'double' を見ているからである。Sarah は、「釘のように丈夫なところが姉さんに似ている」(Chap. 6, p. 93 & p. 98) とずばり指摘した John（Louise の恋人）の洞察の正しさを認めている。この相似性を認めながら、Sarah は Louise の結婚を契機に自分の進むべき方向性を模索していく。

小説冒頭で Sarah は、「教育が高すぎて、しかも天職の意識のない女はどうしたらいいのか」(Chap. 1, p. 8）という問いを投げかけている。姉の結婚は一つの答えであった。その結婚は経済的安定のために愛していない男と一緒になり、恋人もキープし子供も作らないという「結婚の形をとりながらも自分独自の形に結婚を作り直していく」(Chap. 11, p. 180）ものである。しかし最終的にこの結婚は失敗に終わる。

Sarah の女友だちの結婚もロール・モデルにはならない。オックスフォード時代の友人 Gill は卒業後すぐに結婚するが、その結婚生活は同じく画家である夫の絵のモデルの役割に終始し、彼女は自分自身の夢が潰されたと感じている。同じく大学時代の友人 Stephanie と Michael はあまりにも完璧すぎるカップルで、

「あんなにすべてが揃っていては、いつかすべてを手にするかもしれないという期待感が失せてしまう」(Chap. 6, p. 85) と感じさせられる。では独身の従姉 Daphne はどうか。Sarah にとって Daphne の存在は、"a threat to my existence" (Chap. 7, p. 114) であり、彼女を見るたびに地面に押さえつけられる気分になる。

このように、ロール・モデルになり得ない周囲の女性たちの結婚や独身生活を眺めながら、Sarah は「私は葉も花も実もすべてをつけたい、全世界を手に入れたい」(Chap.4,p. 70) という理想を掲げる。その一方で、現実と折り合う地点をも探っていこうとする。

Sarah が「すべてを手に入れたい」(Chap. 6, p. 98) と表現する時のすべてとは、仕事、結婚、子供、友人など、人生を充足させると思われるすべてである。しかし、卒業してみると大学の学位は現実には "useless" (chap. 1, p. 7) であり、すべては容易に手に入らない。Sarah が大学図書館にノスタルジアを覚えるのは、そこが答えを出せる世界だったから、エッセイの課題に答えるためには本に取り組めばよかったし、指導教授からのアドバイスもあったからだ。今は答えが発見できそうな糸口はどこにも見当たらない。[22]

卒業後の Sarah は実家を出て、Gill と共同生活をしながらロンドンの放送局に勤務し、単調な仕事(書類のファイル)をこなしている。その現実の中で "a truly unprecedented mess" (Chap. 11, p. 180) と表現される混乱状態に陥っている。Sarah は自分の姿を鏡にうつしながら、男と違って女は殻のないカタツムリのように無防備であり、最終的には敗北を運命づけられている、と絶望的に女の状況を把握する。

> I looked horrifyingly pregnable, somehow, at that moment: I looked at myself in fascination, thinking how unfair it was, to be born with so little defence, like a soft snail without a shell. Men are all right, they are defined and enclosed, but we in order to live must be open and raw to all comers .... I felt doomed to defeat. I felt all women were doomed. Louise thought she wasn't but she was. It would get her in the end, some version of it, simply because she was born to defend and depend instead of to attack.
>
> (Chap. 2, pp. 28 - 29)

Rose は、ドラブルが *A Summer Bird-Cage* を書いた動機について、ドラブルがケンブリッジ大学の最終学年でシモーヌ・ド・ボーヴォワール (1908 - 1986) の *The Second Sex* (1949) を読んでいた事実を重視している。Rose は、女性を他者の位置、つまり女性を男性の性的対象物、客体の立場に強いる社会の中で女性は自立的、主体的になれるのかと問うボーヴォワールの提言を、ドラブルの場合、小説の形で追求していると解釈する。[23]

Sarah と Louise は、伝統的な妻や母の役割に専念するには学歴が高すぎたし、そうかと言って学歴は「引用文を使って物事を考える能力」(Chap. 3, p. 44) を除いて、特別なものを与えてくれないと気付いている。二人は古いパターンと未だ存在しない新しいパターンとの間に挟まっているわけだ。

しかしながら、Sarah は仕事について真剣に考える一方で、成功に脅え、社会が女性に課す制限や規範を内面化し、「天職の意識がない」(Chap. 2, p. 30) と自認している。例えば、Sarah は、「女が結婚によって自己の存在を正当化する時代は終わった。少なくとも子供ができるまでは」(Chap. 5, p. 74) と言って新しい時代を予感しながらも、同時に研究職という職種については旧弊な見方をする。だから、男性には可能でも、女性が "a sexy don" (Chap. 11, p. 183) になることは不可能だと断言する。Sarah は研究職の本質と女性のセクシュアリティは両立しないと考えているようだ。

同様に、Sarah は、女性の生き方は男性との関係性の中で制約されるという規範に屈服する。だから彼女は、男なしの女は存在価値がないという胸にこたえる「真実」を受けとめざるを得ないと痛感する。(Chap 11, p. 187) 周りの女性の状況を見ながら結婚は解決策にはならないと思う反面で、それでも結婚に憧れる矛盾した心情を見せている。

このように、Sarah はフェミニスト的見解への自覚を見せる一方で、女性の依存性や受動性のノームを深く内面化している。彼女は両者の揺れの中で常に不安を感じている。アメリカ留学中の婚約者との結婚を先延ばしにしているのもその不安感の表れである。結局、Sarah は、女性にとっての新たな可能性を探りながらも、古い伝統的な価値観に同化したいという願望との間で戸惑い、迷い、矛盾に満ちた状態で悩み続けている。

最後に、Sarah のセクシュアリティに対する意識を眺めてみたい。ドラブルの作品では、女性のセクシュアリティは仕事と子育てにそぐわないというテーマがしばしば提示されているが、*A Summer Bird-Cage* では肉体への Sarah の意識はどのように描かれているのだろうか。"sexy don" は女性には無理だという思い込みから、Sarah は、姉の場合は頭はいいがセクシーすぎて学者にはなれず結局、金持ちの男と結婚したのだと解釈する。もう一つの観察対象である Daphne は Sarah が最も拒絶したいタイプ、オールドミスの 'unsexy don' (実際に Daphne は歴史教師) を連想させる女性である。

どちらも Sarah のロール・モデルにはなり得ないので、この二人に取って代わるのが大学時代の友人 Simone である。Sarah から見て Simone の存在は「第二の性」の定義から逸脱した理想的存在に見える。Simone はどこにも属さないがすべてに属する。"Nationless, sexless, hopelessly eclectic, hopelessly unrooted" (Chap. 3, p. 49) と表現される。Simone には世界中を自由に飛び回れる自律性があるが、彼女の特性は "sexless passions" (Chap. 4, p. 70) であり、その両性具有性である。いわば自律の代償となるものは Simone のセクシュアリティであると解釈されている。Sarah は、姉 Louise のように 'sexy' な肉体を武器にしたくもないし、Daphne のように 'unsexy' にもなりたくない。そうかと言って、Simone のように中性的な存在にも到底なれないと結論づける。

> She [Simone] was most purely personal in her life. In most people, and in myself, I am vaguely aware of a hinterland of non-personal action, where the pulls of sex and blood and society seem to drag me into unwilled motion, where the race takes over and the individual either loses himself in joy or is left helplessly self-regarding and appalled. (Chap. 4, p. 71)

上記の引用で明かとなるセクシュアリティへの強い意識と、容姿の美しさへの Sarah のこだわりは、魅力に乏しい Daphne の容姿を酷評する時に鮮明になる。特に次の引用は、Daphne と比べるにつけ美しい自分の肉体に愛おしさを覚え、鏡にうつった自分の身体を Sarah がナルシスティックに抱きしめる場面である。

> Flesh is a straight gift, I concluded: those who have got it had better make the most of this world, because they evidently were created for it and not for the next one. I sat there a moment longer, then stood up and looked at myself in the mirror. Myself stared back at myself, caught in a paroxysm of vanity. I hugged my own body in my own arms. My own flesh. Indisputable. Mine. (Chap. 10, p. 168)

この場面に関してはさまざまな解釈が可能だが、[24] 総じてSarahは自分のセクシュアリティに対して、仕事や結婚に対する態度と同様に、極めて‘ambivalent’であると言えるだろう。母親像マリアと誘惑者イヴの二分化された女性の性のイメージ、[25] この二項対立的な性役割のノームをSarahは内面化している。二つのものはSarahの中で二律背反的な反応を生じさせる。性愛と母性は刺激と憧憬の対象でもあるし、同時に彼女を脅えさせ不安に駆り立てる対象でもある。次の引用はSarahのそうした潜在意識下の矛盾する感情が呼び起こされる場面である。ある日、本屋に立ち寄った時、店内にいた幼い子供がSarahの足を両手でたたき始める。子供はSarahの黒いストッキングに興味を持ったのだろう。

> I cannot say how strange and primitive those hands felt. My legs seemed to stir to life under them: they began to heave out of their usual careful torpor and to burn under me with an awful warning. Perhaps one perpetually expects larger hands to reach under one's skirt. It was simply the smallness of those that disturbed me.
> (Chap. 10, p. 169)

子供の手の感触から、彼女は自分の中の性的感覚を確認し、同時にその性的感覚は足をたたく子供の存在を通して潜在的な母性感覚にも結びつけられる。性愛や母性への期待感にあふれる彼女の意識は、同時に“an awful warning”を発しながら覚醒していくので、ここでは彼女の不安感も明かである。

4．絆の回復 ― 一時的決着

この論考の1章で触れたように、ドラブルが*A Summer Bird-Cage*を書いた意図の一つは、姉バイアットとの関係に対する強迫観念を追い出すことにあった。Bokatは、ドラブルが小説を手段にして“repetition compulsion”の心理作用を行ったと解釈した。[26] そしてこの作品を書くことでドラブルはある程度、“obsession”を追い払ったのかもしれない。*A Summer Bird-Cage*ではSarahはある程度、姉との確執から解放され、二人の関係性の回復を達成しているから、この結末を作ることでドラブル自身の過去のトラウマも部分的に癒されたと言えるだろう。

解放の予兆は、Sarahが姉のパーティから逃げ出し裸足で走り出す場面に読み取れる。この時、「彼女は鎖がくるぶしからはずれて、重荷が背中から降ろされたような」(Chap. 8, p. 133) 解放感を味う。その解放の予感が現実のものとなるために、二人の立場の逆転という結末が用意されている。

この論考の3章冒頭で触れたように、SarahとLouiseの確執は分裂した自我の比喩であり、二人の相補性を暗示するものだったが、二人の関係性が回復する時もこの相補性が繰り返される。小説最終章の場面は、姉が妹Sarahを無視し蔑んだ子供時代の主従関係を逆さにして再現した場面である。ここでは姉妹の過去の立場が逆転している。力関係の逆転によって、姉へのSarahの敵意は鎮火していく。

二人の関係は勝ち負けという言葉でたびたびSarahによって言及されている。[27] Sarahの言い分としては、自分に競争心を起こさせたのは姉が優越感を誇示したからだという論法で、二人の闘争の因果関係を説明する。(Chap. 7, p. 103) それにも増して、彼女自身の姉への闘争心や怒りは小説の随所から充分に読み取れる。[28] Sarahの激しい闘争心は、二人の立場が逆転する最後の場面で、つまり姉を打ちのめそうとする力の行使の場面で最も明らかになる。

助けを求めて訪ねてくる姉に対して、Sarahは優位に立った気分になる。その晩、Louiseは恋人とバスルームにいる現場を夫に目撃され家から追い出される。次の場面は、電話口でたのみ込む姉とそれを楽しむSarahの会話である。

> 'I said you couldn't come,' I said. I enjoyed, in a simple way, the feeling of power. 'You've got to let me come,' said Louise. 'There's no one else dare ask.' ... "OK, I suppose you can come, as long as you realize that you won't be very welcome. That I'm doing you a favour." (Chap. 11, p. 191)

この場面では、Louise はものを頼む立場で、Sarah は恩着せがましい態度をとる側である。過去の二人の立場の逆転を演じることで Sarah は姉に勝利する。Bokat は、ドラブルが自分の小説作品を使って、姉バイアットへの "revenge fantasy"[29] を充足させてきたと述べているが、Sarah も姉が求める助けを拒否することで "revenge fantasy" を充足させている。

しかしながら、Sarah の解放は単に復讐劇の逆転勝利によって達成されるばかりではない。"communication and intimacy"[30] が二人の関係を回復させている。その能動的な回復過程が重要である。Sarah は電話口の姉に対して初めてずけずけとものを言う。この場の率直さは、友人 Gill と Sarah の喧嘩の再演でもある。Sarah は中絶と離婚を経験した Gill に気を遣うあまり、Gill に対して率直になれない。一方、Gill は Sarah が正直に話してくれないことに憤りをおぼえ、無視されるほうが数倍つらいと告白する。この率直で直接的な言葉が二人を隔てる壁を打ち破り、二人は打ち解けることができる。(Chap. 7, pp. 107 – 109) 互いの失態を見たり見られたりすると、人間は誰もが欠点を持つ弱い存在であると確認し合える。その時、自分の惨めな気分は、共感の喜びのほうが大きいために、充分に償われるという感覚である。

Sarah と Louise の場合は、姉の突然の電話に Sarah が腹を立てその無神経さを非難することで、一方 Louise のほうは妹の前で虚勢を解くことで、両者の気持はほぐれていく。いつもの黒いストッキングの代わりに、その晩の姉はむき出しの白い素足に化粧着だけをまとった無防備の身を妹の前にさらけ出す。Louise の話を聞きながら、Sarah は二人に共通する欠点 —「一瞬を全体として捉える衝動、一面を全体として見ようとする衝動は私と姉を混乱させる衝動である」(Chap. 11, p. 206) — つまり、ものの見方の狭さをも共有することに気付いている。こうして、人間の過ちや弱さを共感することで、Sarah は姉との確執から解放される。その拘束と解放感は、小包(恐怖と偏見)とそれを縛っていた古いひもが切れるという比喩で表現される。[31]

> ... something very very old snapped in me. It snapped as though it had been a piece of old and rotten string, long useless, long without any power to tie, and yet still wrapped round and confining an ancient parcel of fears and prejudices. It snapped, and the parcel spilled apart all over the floor.
> (Chap. 11, pp. 191 – 192)

この後、Louise は Sarah に何でも打ち明けるようになるから、今後は確執を乗り越えて姉妹の新たな絆が築かれるだろうと期待される。例えば Louise は夫に目撃された時にバス・キャップをかぶっていたことと、その滑稽な姿のせいで喧嘩ができなかったことを妹に話して聞かせる。この調子で、結末では今後の楽観的な見通しがほのめかされている。だが、この回復の結末は、論考の 3 章で扱った Sarah 自身の統合的な自我の確立の問題への解答にはなっていない。彼女は仕事や結婚やセクシュアリティを自分の中で消化し統合できないまま矛盾を抱えて迷い続けていたが、姉妹愛の回復はその迷いを解決する万能薬にはならない。ただし、今後の模索へのとば口となり、社会的孤立感や疎外感から脱出するための糸口にはなっている。Sarah は姉妹愛の中に自分の居場所を一時的にでも見つけることができたから。

さらに、この回復物語は、姉妹の確執の終結という点から見ても、あくまで一時的で部分的な決着である。と言うのも姉妹の確執のテーマは、第一作目のこの小説の出版のあと、第三作目（*The Millstone*, 1965）以降でも再び執拗に描かれるからだ。*A Summer Bird-Cage* における姉妹の絆の修復過程はドラブルが提示した最終的な結論ではない。その意味で、姉バイアットへのドラブル自身のトラウマも、*A Summer Bird-Cage* において全面的に癒されたわけではなく、一時的、部分的に癒されたにすぎない。ただし、最初の作品の未決着な状態が却って創作意欲の負の原動力となったことも確かであろう。

注

1. Margaret Drabble, *A Summer Bird-Cage* (1963) (London: Penguin Books, 1967) この作品からの引用および関連箇所は本文中に章と頁数のみを記す。
2. 拙論「古い物語から新しい物語へ — 19世紀小説の 're-vision' としての *The Waterfall*」(『同志社女子大学学術研究年報』第49巻 I, 1998), pp. 25 - 59 を参照。
3. Arnold E. Davidson の論文は、*A Summer Bird-Cage* の Bennett sisters (Sarah と Louise) の物語を、Jane Austen の *Pride and Prejudice* の現代版と見なし、両作品の関連性 — 平行する部分と分岐する部分 — を分析している。

   Arnold E. Davidson, "Pride and Prejudice in Margaret Drabble's *A Summer Bird-Cage*" *in Alizona Quarterly, 38* (Winter, 1982), pp. 303 - 310.

   また、Gyde Christine Martin は、*A Summer Bird-Cage* と George Eliot の *Middlemarch* との間の "intertexual dialog" について分析し、19世紀の背景とは異なる現代女性の状況を探索することが、*A Summer Bird-Cage* と *Middlemarch* をパラレルに置いた理由だと解釈している。

   Gyde Christine Martin, *The Struggle for Continuity in the Novels of Margaret Drabble* (Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1986), pp. 11 - 17.

   その他、Roxman も *A Summer Bird-Cage* が *Middlemarch* から 'plot' を借用している点を指摘して、両作品の関係を調べている。

   Susanna Roxman, *Guilt and Glory. Studies in Margaret Drabble's Novels 1963-80* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1984), pp. 14 - 18.
4. Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: A Reader's Guide* (New York: St. Martin's Press, Inc., 1991), p. 25.
5. Sarah Annes Brown, *Devoted Sisters: Representations of the Sister Relationship in Nineteenth-Century British and American Literature* (Aldershot: Ashgate, 2003), pp. 4 -7.

   また、ギリシャ悲劇を変形させ、再解釈させたものとしての *Middlemarch, Howards End, Women in Love* についての研究は下記の本に詳しい。

   Masako Hirai, *Sisters in Literature: Female Sexuality in Antigone, Middlemarch, Howards End and Women in Love* (Basingstoke: Palgrave, 1998)

   さらに Levin の研究では、女性作家の小説の中に登場する血縁の姉妹関係がフェミニストが理想とした 'sisterhood' の理想とはかなり異なり矛盾していると指摘されている。その原因を、女性心理、女性への社会的期待、家父長的な神話や物語の中に探っている。取り上げている作家は、Jane Austen、Elizabeth Gaskell、George Eliot と 20世紀の女性作家 Barbara Pym、Elizabeth Jane Howard、Margaret Drabble、Emma Tennant である。

   Amy K. Levin, *The Suppressed Sister: A Relationship in Novels by Nineteenth- and Twentieth-Century British Women* (Lewisburg: Bucknell UP. & London: Associated UP, 1992)
6. 第一作目の *A Summer Bird-Cage* の姉妹関係に始まって、*The Millstone* (1965) の Rosamund と姉 Beatrice の断絶、*Jerusalem the Golden* (1967) の Clara と女友だち Clelia の代理母・代理姉妹の関係、*The Waterfall* (1965) の Jane と従姉の Lucy の代理姉妹の絆と確執、*The Realms of Gold* (1975) の Fra-

nces と親類の Janet の関係に見られる代理姉妹の友情、*The Ice Age* (1977) の Alison と姉 Rosemary の確執、*The Radiant Way* (1987) の Liz と妹 Shirley の確執、*A Natural Curiosity* (1989) では異父姉 Marcia の登場によって回復される Liz、Shirley、Marcia の三姉妹の絆、*The Witch of Exmoor* (1996) の Frieda と姉 Everhilda の確執などである。

7. Arthur Lubow, "Charms and the Man" in *Vanity Fair* 1991, September, p. 240.

Nicole Suzanne Bokat, The *Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus"* (New York: Peter Lang, 1998), pp. 56 – 57.

8. "A. S. Byatt Interviewed by Juliet A. Dusinberre" in Jane Toss (ed.), *Women Writers Talking* (New York & London: Holmes & Meier Publishers, 1983), p. 190.

9. Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: A Reader's Guide*, p. 24.

Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble "this Freudian family nexus"*, pp. 58 – 61.

ただし、バイヤットはこの作品は自分の実人生に基づいたものではないと言っている。

"A. S. Byatt Interviewed by Juliet A. Dusinberre" in Jane Toss (ed.), *Women Writers Talking*, p. 190.

Levin も、*A Summer Bird-Cage* の描写の中にドラブルと姉 Byatt の確執のパラレルとなる箇所を取り上げている。

Amy K. Levin, *The Suppressed Sister: A Relationship in Novels by Nineteenth- and Twentieth-Century British Women*, p. 111.

10. Dee Preussener, "Talking with Margaret Drabble" in *Modern Fiction Studies Vol.* 25, 1979, pp. 572 – 573.

11. Margaret Drabble, *Jerusalem the Golden* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1967), p. 143 & p. 187.

12. Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus,"* pp. 12 – 13 & p. 58.

13. *Ibid.*, pp. 5 – 6 & p. 250.

14. *A Summer Bird-Cage* (1963) の Sarah を初めとして、*Jerusalem the Golden* (1967) の Clara、*The Needle's Eye* (1972) の Rose、*The Realms of Gold* (1975) の Frances、*The Middle Ground* (1980) の Kate、*The Radiant Way* (1987) の Liz などはいずれも、故郷に帰ることを契機に自己規定や自己統合を試みている。

15. Dee Preussener, "Talking with Margaret Drabble," 1979, pp. 572 – 573.

16. この引き出しを探るという行為は、*Jerusalem the Golden*、*The Needle's Eye*、*The Realms of Gold*、*The Radiant Way* でも繰り返されている。

17. Mary Hurley Moran, *Margaret Drabble: Existing within Structures* (Carbondale and Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1983), p. 66.

18. Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus"*, p. 64.

19. Myer は、ドラブルの小説では "maturity" はハグしたりキスしたりする能力を意味していること、そして家族が互いの身体に触れ合うことに怖じけるというパターンはドラブル作品の中で繰り返されるモチーフであることを指摘している。

Valerie Grosvenor Myer, *Margaret Drabble: A Reader's Guide*, pp. 21 – 22.

20. "A. S. Byatt Interviewed by Juliet A. Dusinberre" in Jane Toss (ed.), *Women Writers Talking*, p. 190.

21. Sarah Annes Brown, *Devoted Sisters: Representations of the Sister Relationship in Nineteenth-Century British and American Literature*, p. 11.

22. Louise も同じ思いを "All those books I used to read, and I could never work out the simplest thing from them" (Chap. 11, p. 196) と言って、答えや方向性のない不安定感を慨嘆している。

23. Ellen Cronan Rose, *The Novels of Margaret Drabble: Equivocal Figures* (London: Mcmillan, 1980), pp. 1 – 2

24. Bokat は、Sarah が「女性の性的に劣った立場に対する代償行為としての肉体的魅力への執着」という Freud 的解釈に対して不快感を感じていることは確かだ、と述べている。Sarah は理知や知性を重んじているし、肉体

美を武器にした姉の生き方を受け入れていない。しかしながら、全体的にはSarahは、Louiseが下したDaphneへの過小評価に同感しているし、Louiseの美しさは賞賛の対象でもあるから、彼女はやはり外見への“obsession”という文化的ノームによって生じる病気を内面化している、とBokatは解釈している。

二つ目の解釈は、Davidsonの、Sarahの虚栄心の高まりは彼女がLouiseから解放されるために必要な自己認識である、という解釈である。Louiseは、食うか食われるかの男性社会の中で力の誇示のための道具として、競争心を自分に取り入れている。Louiseにとって、生き残るために自分の肉体美を使うのは極めて合理的なことだから、自分と妹を「肉食動物」(Chap. 10, p. 165) にたとえ、Daphneを「草食動物」(Chap. 10, p. 165) にたとえて両者の力の上下関係を明らかにする。「Daphneのような草食動物を食べて私たち肉食動物は生きている」と断言するLouiseの考え方に、Sarahも結局は同意する。Davidsonは、多くの読者は二人のこの会話から、甘やかされて育った姉妹の虚栄心を感じ取るかもしれないが、ドラブルが意図しているのはそのことではないと述べる。間違った謙遜は間違ったプライドよりも世間受けがいいが、それは自己欺瞞にすぎない。むしろ、自分の容姿にプライドを持つことで、Sarahは自分が姉と同様に“a high-powered girl”(Chap. 6, p. 96) であるという自信に満ちた自己認識を獲得できる、という解釈である。

三つ目はMoranの解釈、Sarahの肉体美への関心は生物的な視点から自分自身を理解し、やがて全体的な“identity”への把握へと進んでいく過程の一つ、という見方である。ドラブルにとっては、美や知性や才能や富は否定されるべきものではなく享受されるべきものだという観点から、“flesh, and blood and sex”への強調は人物たちの“a fuller sense of identity”の過程にとって非常に重要な要素である、とMoranは解釈する。

Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus,"* pp. 153 - 154.

Arnold E. Davidson, "Pride and Prejudice in Margaret Drabble's *A Summer Bird-Cage,"* pp. 308 - 309.

Mary Hurley Moran, *Margaret Drabble: Existing within Structures*, pp. 43 - 47 & p. 60.

25. Sarahの矛盾した行動についてはRainesの論述が興味深い。

Helon Howe Raines, *The Moving Sphere: Margret Drabble's Novels of Connection and Contradiction (Feminist)* (Ann Arbor:UMI Dissertation Services, 1985), pp. 43 - 48.

26. Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus"*, p. 66.

27. Chap. 2, p. 25, Chap. 10, p. 167, Chap. 11, p. 186を参照。

28. Sarahは姉より自分のほうが頭がいいと自負しているし、二人の興味、知性、オックスフォード大学への進学という共通点にむしろ根深い競争心が潜んでいたことを認識している。参照 pp. 135 - 6 & p. 103.

29. Nicole Suzanne Bokat, *The Novels of Margaret Drabble: "this Freudian family nexus,"* pp. 82 - 83.

30. Brenda McCracken Keegan, *To Endeavor in the Face of the Impossible: Narrative Paradox in Margaret Drabble's Early Novels* (Ann Arbor: UMI Dissertation Services, 1991), p. 59.

31. この箇所に関してLevinは、"very very old"な絆('tie')はSarahがつくり上げた姉Louiseの虚構の姿であり、また姉妹の絆という虚構へのSarahの固執であり、"parcel of fears and prejudices"は、この虚構に縛られて生きてきたSarah自身の感情を表す、と解釈している。言い換えれば、「古い絆」は姉妹像に対するSarahの虚構的理想、"parcel"は姉妹の確執関係をつくり上げている現実のSarahの感情を表す、と解釈されている。

Amy K. Levin, *The Suppressed Sister: A Relationship in Novels by Nineteenth- and Twentieth-Century British Women*, p. 116.